

あけましておめでとうございます



下田市議会議長
中村 敦

新年あけましておめでとうございます。市民の皆様におかれましては、輝かしい新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて、昨年は長く続いたコロナ禍から解放され、平穏な日常の尊さを実感しました。

また河津下田道路の一部開通により、初めての高規格幹線道路が地域に登場し、その堅牢さと快適さに、安全安心な暮らしと地域の発展には「良い道」が必要であると再認識しました。議会は今後益々の要望活動に邁進いたします。

その議会においては、改選により半数以上が初当選となることで大きく若返り、待望の女性議員も誕生し、多種多様な活発な議論が展開されています。

新しい年、令和6年の変化の一つが、旧校舎を活用した新庁舎への一部移転です。新庁舎は防災拠点としての機能を確保すると同時に、市民サービスの向上と行政の効率化に寄与し、利用する全ての人にとって便利で快適な空間でなければなりません。

「二年の計は元旦にあり」。何事も初めが大切であり、移転と同時に転換を図れるよ

う、当局と協力してまいります。議会は議会運営の効率化とデジタル化を推進すべく、タブレット導入とペーパーレス化を進め、より開かれた議会を目指します。

一方、中国故事に由来する「百年の計」の言葉は、遠い将来まで見据えよと教えます。現庁舎跡地を含む駅前再整備、みなとまちゾーンと旧町内の活性化、伊豆縦貫自動車道の開通後のあり方など、議会では常に次世代を見つめていきます。

直近では人口減と高齢化が最大の課題です。しかし、如何なるときも私たち下田市民が、自然と共生し心豊かに暮らすことこそが、定住にも移住にも観光にも選ばれるまちとなるでしょう。さらなる公共の福祉、医療、教育、経済の充実を図り、市民の皆様と共に考え協働し、下田市の明るい未来のために、議会は全力を尽くします。

皆様と下田市のより良い年となりますよう祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。本年もご支援下さいませ、何卒よろしくお願い申し上げます。



下田市長
松本 正一郎

令和6年が始まりました。新春を寿ぎ申し上げます。

さて、昨年の大河ドラマ「どうする家康」では、その終盤にすさまじいシーンがありました。大坂城に向かって大砲を並べ、次々に打ち込む家康。城に自分の娘千姫がいる秀忠は砲撃をやめるよう家康に懇願しますが、家康は攻撃を緩めず、これが人間の最も醜く愚かな行為だと言ひ、こんなことは自分の代で終わらせる、と悲痛な覚悟を語ります。正に今日の国際社会に向けたメッセージであらうと思います。

ウクライナやガザ地区などでは、今も戦いが続いています。いつの時代の争いにおいても、双方自側に正義があると主張している。このような正義と正義の対立を見ると私はある映画を思い出します。主人公の気の弱い先生が言ったセリフがとても印象的なのです。ある生徒の祖母（とても厳しい人）が正論を言って、私の言い分は間違っているかと質す。すると先生は、それは正しいと思う、と答える。しかし、そのあと「でも：優しくない」と言う。

祖母は何を言うかと睨むが、先生は勇気を出して続ける。「正しさと正しさはぶつかるけど、優しさと優しさはぶつからない」「正しいことをするのは大切だけど、優しいことをする方がもっと大切」と。私は胸をつかれました。

21世紀の今、私たちは多様性という概念を掲げています。これは多様な価値を認め合おうということであり、それには正しさよりも優しさが大切であらうと思います。多様な価値を「文化」と読み替えると、私たちは文化の力を信じて、それを高めることが大切、ということになると思います。

太平洋戦争終結の年に角川書店を創業した角川源義氏はこう言っています。「第二次世界大戦の敗北は、軍事力の敗北であつた以上に、私たちの若い文化力の敗退であつた」。

文化力を高め、そして人と人が優しきでつながる。そうすれば下田はいえ世界はきっとより良い方向に変わっていくのではないのでしょうか。

グローバルシティを標榜する下田市がその先駆者たらんと期して年頭の挨拶といたします。